

『逍遙遺稿』札記

——落合東郭のこと——

一

明治十六年八月に十七歳で東上の夢を果たしてから三年、第一高等中学に学ぶ逍遙中野重太郎が二十歳の時に筆を染め未完に終わった小説に『慈涙餘滴』と題する作がある。半紙版二十四行野紙に手書され全部で四十九枚。最初の部分は「秋空涙雨」と題し、明治十九年九月の執筆。第二部は明治廿年七月と記された「続稿附紀行」で、更に第三・第四の「続稿」があり、本文の外に「新春雜感詩、録して以て小序に代ふ」と題する七絶七首(明治二十三年正月作)及び緒言(明治二十二年十月八日附)が添えられている。

その内容は、明治十九年九月、帰省を終え上京の途に就いた逍遙子が伏見に母方の叔父を訪うべく、神戸三宮から京都に向かう汽車のなかで、大阪から乗り合わせた六十ばかりの上品な老婦人とその孫の十四五の少女とを見かけるところから始まって、翌日の伏見における三人の再会、それぞれの身の上話に筆が進む。老婦人の夫は、

二 宮 俊 博

維新の際、会津桑名の側に属して伏見で戦死し、少女の父親は十四年にコレラに罹って急逝、ひとりいた兄は慶応義塾に進んだものの放蕩に身を持ち崩し、それを憤って母親も心痛のあまり他界したのだという。その後、逍遙子は二人と別れ、京、大津を経て四日市に出、海路東京に戻った。翌二十年早春、かねてより孫に新時代の女子教育を受けさせたいと願っていた老婦人が少女をつれて上京し、逍遙子は二人の訪問を受ける。少女は英学を学びはじめ、初め亡くなった祖母に接する思いで老婦人に対していた逍遙子ではあったが、次第にこの少女に心惹かれ、ほのかな恋情を抱くようになる。その後まもなく老婦人が突然この世を去り、未完のままとなる。——という話で、そのなかに登場人物の口を藉りて文明批判の言葉が陳べられており、東海散士の『佳人之奇遇』から影響を受けた一種の政治小説とされている。^(注)

この『慈涙餘滴』は、中野逍遙の歿後百年を経た平成六年十一月、彼の故郷愛媛県宇和島市在住の河野傳氏の尽力によって影印刊行されたが、その中の「続稿附紀行」に、

四方ノ交、韻雅ヲ以テ相合フノ士ハ獨リ肥藩ノ東郭子ガ八月初旬東都ヲ發シテ相州江ノ嶋ニ遊ブアル耳

と記され、この当時、学校などでは極めて口数少なく、高等中学二年の時には同級生から「the Silent」と評されたこともあった逍遙ではあるが、詩文の友として（肥州の東郭子）即ち熊本出身で東郭と号した落合為誠とはかなり親しく、互いを認めあっていたことが窺われる。

逍遙と東郭との訂交が具体的に何時どのようなにして始まったのか、現在のところ詳らかにし得ないが、長年にわたり中野逍遙に関する資料を博搜蒐集して来られ影印本『慈淚餘滴』に序文を寄せられた川崎宏氏は、「本文各所に打たれている傍点圈点および欄外の頭評記述の文章は、私の推定ではあるが東郭落合為誠によるものである」と述べた上で、逍遙と東郭との交友が逍遙の大学予備門（明治十九年四月、第二高等中学校と改称）入学以来のものであることを指摘されている。さらに東郭に四百七十字程の「慈淚餘滴序」がある由、紹介されているが、残念ながら未見である。

また同じく川崎氏の『中野逍遙の詩とその生涯——夭折の浪漫詩人』（愛媛県文化財団、平成八年三月）によれば、中野逍遙が明治二十年の夏休み中、八月六日から二十八日まで房総に遊んだ際の旅行記「房総漫遊小記」にも、落合東郭の評語が載せられているという。さりながら、逍遙が二十八歳で溘然として世を去った後、その一周忌にあたる明治二十八年十一月、文科大学の友人達の手によつて上梓された『逍遙遺稿』正外二編およびそれに添附された「発起人賛成者及出版費義捐金額」の一覧表には、落合東郭の名が全く見えない。それには何か事情があつたのであろうか。

このノートでは、中野逍遙と落合東郭との交流の一端をみていく

とともに、こうした疑問について、私なりに思うことを覚書として記しておきたい。

二

さて、『慈淚餘滴』の「続稿附紀行」には、先に引用した箇所が続けて、

坡仙ガ茲遊奇絶冠平生。ノ句ヲ分テ韻トナシ其口占七首ヲ寄テ曰ク

と、江の島に遊んだ東郭が、〈坡仙〉すなわち北宋の文人蘇軾（東坡）の七律「六月二十日、夜 海を渡る」詩の結びの句の七字をそれぞれ韻字に用い、即興で五言六句の詩七首を作つて寄こしてきたのを挙げている。今、ここに読み下し簡単な語釈を附して示しておく。（以下の引用において、圈批点は全て省略する。なお、其一〜其七は便宜的につけたもので原文にはない。）

其一

縹緲海中島	縹緲たる海中の島
懸崖百尺危	懸崖 百尺危し
極目千里外	極目 千里の外
長風吹吟髭	長風 吟髭を吹く
蓬瀛何足道	蓬瀛 何ぞ道ふに足らん
遊仙宛在茲	遊仙 宛も茲に在り

○縹緲 遠く微かなさま。疊韻の語。唐・白居易「長恨歌」に「忽ち聞く海上に仙山有り、山は虚無縹緲の間に在りと」。○海中島 江の島。○懸崖 切立った崖。江の島は周囲約四キロ。四面みな断崖である。○百尺 高いことをいう。もとより実数ではない。○極目

見渡す限り。『楚辭』宋玉の「招魂」に「目は千里を極め春心を傷ましむ」と。○長風 遠くから吹いてくる風。○吟髭 詩人の髭。○蓬瀛 蓬萊と瀛洲。神仙の住む島。『史記』秦始皇本紀に見える。○遊仙 仙界に遊ぶ。

其二

晨踏嶺頭雲 晨に踏む嶺頭の雲
夕登海中樓 夕に登る海中の樓
碧濤浸樓下 碧濤 樓下を浸し
皓月滿樓頭 皓月 樓頭に満つ
飄然將忘世 飄然として將に世を忘れんとす
疑是鼈背遊 疑ふらくは是れ鼈背に遊ぶかと
○飄然 高遠なさま。例えば、『文選』卷十八、西晉・成公綏の「嘯の賦」に「心滌蕩として累無く、志俗を離れて飄然たり」と。○疑是 くではないかと思う。くのような気がする。○鼈背 鼈は、大きな海亀。寺門靜軒『江戸繁昌記』四篇、画嶋の条に「瀕にして之を望めば、譬へば一大亀の潮を仰ぐが如く然り。金亀の号、蓋し諸を此に取る」とあり、江の島を大海亀に見立てている。

其三

落日紅將盡 落日 紅 將に尽きんとし
纔啣崖頭枝 纔かに啣ふ崖頭の枝
水天唯彷彿 水天 唯だ彷彿
佳矚方此時 佳矚 方に此の時
何得坡仙起 何ぞ坡仙を起こすを得て
相共論両奇 相共に両奇を論ぜん
○纔 ようやく。やっと。○水天 海が広がって空と連なる。○彷彿 髣髴とも書く。双声の語。あるかなきかの微かなさま。頼山陽

「天草洋に泊す」詩に「水天髣髴青一髪」と。○佳矚 すばらしい眺望。○何得 ここでは、どうにかしてゝしたいものだ、という意を表す。その場合、正しくは安得とすべきである。坡仙 北宋・蘇軾の号、東坡居士に因んだ敬称。○起 地下に眠る霊を呼び起こす。○論 優劣をつける。○両奇 この江の島のすばらしさと蘇軾が「奇絶」と評した海南島から中国本土の雷州半島に渡る旅路と。
※なお、結句の後に朱筆で「笑我隴蜀意、更欲見両奇」（我が隴蜀の意を笑へ、更に両奇を見んと欲す）と書き込まれているが、これは東郭の手による訂正であろう。

其四

危磴拝祠去 危磴 祠を拝して去り
倚杖看断碑 杖に倚りて断碑を看る
云是宋代物 云ふ是れ宋代の物と
文字既磨滅 文字既に磨滅す
懷古時彷徨 古を懷ひて時に彷徨すれば
深林鳥声絶 深林に鳥声 絶ゆ
○危磴 急峻な石段。○祠 弁財天を祀る祠。○倚杖 杖にもたれて。○断碑 伊藤東涯『輶軒小録』に「相州江嶋ノ祠ノ側ニ古碑アリ、(中略)石断エテ横紋アリ、文字湮滅シテ知ルベカラズ、(中略)相傳フ、土御門院ノ時、良眞ト云フ僧アリ、入宋シテ慶仁禪師ニ得テ帰ルト」云々とある。

其五

突彼稻邨崎 突たる彼の稻邨崎
閱盡當年難 閱し尽くす当年の難
桓々左中將 桓桓たる左中將
投劍自彼岸 劍を投ずるは彼の岸自りす

通望岸上松

儼乎其如冠

遙かに岸上の松を望めば
儼乎として其れ冠の如し

○稻邨崎 鎌倉の南部、七里が浜と由比ヶ浜との間の岬。稻村ヶ崎。
新田義貞が名剣を投じ、潮の引いたのに乗じて鎌倉に攻め入った所。

『太平記』卷十に見える。○桓桓 たけだけしいさま。『詩経』周頌・桓に「桓桓たる武王、厥の土を保有す」と。○左中將 新田義貞のこと。左近衛中將に任じられた。○儼乎 厳かなさま。

其六

日入望更幽

日入りて 望 更に幽に

月出望逾清

月出でて 望 逾いよ清し

雲海万里濶

雲海 万里闊く

清光此際情

清光 此の際の情

胸裏苟如此

胸裏 苟も此の如くならば

洞然物自平

洞然として物自づから平らかなり

○雲海 海原の雲に接する彼方。○洞然 からりとして広々としたさま。○物自平 おのれを含め万物が平衡を保ち、調和している。

其七

晓来暇矚處

晓来 暇に矚する処

風光不可名

風光 名する可からず

晴靄抹蛋舍

晴靄 蛋舍を抹し

岳雪半天明

岳雪 半ば天明

激瀧三百里

激瀧 三百里

紅噉蹴波生

紅噉 波を蹴つて生ず

○不可名 その美しさ名状しがたい。○晴靄 晴れた日に立ちのぼる朝もや。○蛋舍 漁師の苫屋。○岳雪 雪を冠した富士山。○激

瀧 水面のひろびろと広がるさま。疊韻の語。蘇軾「湖上に飲す、初め晴れ後に雨ふる」詩に「水光激瀧晴れて偏に好し」と。○紅噉 旭日。なお 結句については逍遙の「明治十九年丙戌、予帰つて親を省す。七月十四、東京を発し、十六日神戸に着く。偶たま感じて長古一篇を作る」と題する詩（『逍遙遺稿』正編）に「紅噉波を蹴つて驚よりも疾し」とあり、東郭はそれを踏まえているのではなからうか。逍遙の句は若々しい潑刺とした表現であるように思う。

さらに、「又平生ノ感懷六首ヲ寄ス今其三ヲ録シテ曰」と、逍遙は落合東郭から寄せられた五七雑言体の次のような詩も挙げている。

俯看噉喁魚

俯して看る噉喁の魚

仰聽和鳴鳥

仰いで聴く和鳴の鳥

二者雖小也

二者小なりと雖も

各得自然妙

各おの自然の妙を得たり

妙理從來誰商量

妙理 從來 誰か商量せん

悠々遠思在彼蒼

悠悠たる遠思 彼蒼に在り

○噉喁 魚が水面に浮かび出て呼吸する。双声の語。『文選』卷五、西晉・左思「吳都の賦」に「噉喁浮沈」と。○和鳴 仲好く鳴き交わす。『中庸』に『詩経』大雅・旱麓の句を挙げて「詩に云く、鳶飛

んで天に戻り、魚淵に躍ると。其の上下に 察かなるを言う」とあり、鳥や魚までが楽しげなのは、中庸の道が明らかに顕れたものとする。○悠々 はるかに思うさま。『詩経』邶風・雄雉に「彼の日月を瞻る、悠悠たる我が思ひ」と。○商量 はかり考える。○彼蒼 天をいう。『詩経』秦風・黃鳥の「彼の蒼たる者は天」に基く語。

輕風吹面上

輕風 面上を吹き

皎月到天心

皓月 天心に到る

對之豈無感

之に對して豈に感無からんや

一念入古人 一念 古人に入る

嘆息古人今不見 嘆息す古人 今 見えず

世間空有文章煥 世間空しく文章の煥たる有り

○輕風 そよ風。○天心 天の真ん中。○古人今不見 唐・陳子昂

「幽州の台に登る歌」に「前に古人を見ず、後に來者を見ず。天地の

悠悠たるを念へば、独り愴然として涕下る」と。○煥 輝く。『文

選』卷十五、後漢・張衡「思玄の賦」に「文章煥として以て燦爛た

り」と。煥は煥と同じ。

登高一遐觀 登高して一たび遐觀すれば

芙蓉落眉間 芙蓉 眉間に落つ

寬溫而雄麗 寬溫にして雄麗

五州無此山 五州 此の山無し

寄言永秀東海表 言を寄す永秀東海の表

不虧不崩護皇境 虧けず崩れず皇境を護れと

○遐觀 はるかに眺める。○芙蓉 富士山の頂が八弁の蓮華に似て

いるのでかくいう。○五州 五大陸。世界中。○不虧不崩『詩經』

魯頌・閟宮に魯の國を寿いで「彼の東方を保ち、魯邦是れ常。虧け

ず崩れず、震かず騰らず」云々と。○皇境 わが國をいう。

小説の構成を緊密にしようとすれば、中野逍遙がこれらの詩をわざわざ挙げる必要はないのだが、それにもかかわらず、こうして書き出しているのを見ると、よほど東郭と意気投合し、その詩才を認めていたものらしい。

三

では、落合東郭とは如何なる人か。やや後のことになるが、五高

教授在任中の夏目漱石が一時期、東郭の留守宅を借りて住んでいたことは、漱石の伝記に興味を抱いている人にはよく知られているようが、それ以外の事柄になると、明治大正昭和の三代にわたり漢詩人として活躍したことも含め、現在ではさほど識られているとは言いがたい。そこで今、『日本近代文学事典』（日本近代文学館編、講談社、昭和五十二年）を繙いてみると、村山吉廣氏の執筆で次のようにある。

慶応二・一・一九〇〇昭和一七・一・一九（1865-1943）

漢詩人。肥後熊本生れ。名は為誠。東大選科卒。宮内省に出仕。

帰郷後、五高、七高教授歴任。明治四三年、ふたたび上京し、

大正天皇の侍従となり天皇崩御後は図書寮で伝記を執筆。昭和

一一年熊本に隠棲、詩作三昧の生活を送る。同郷の元田永孚の

号である東野にちなみ東郭と号したが、森槐南に師事し、清の

王漁洋の詩風を学び、当代第一の名があった。ほかに書にも巧

みであった。享年七七。

また、猪口篤志氏の『日本漢詩鑑賞辞典』（角川小辞典22、昭和十五年）では、その生卒年を一八六七〜一九四二とし、

落合東郭、名は為誠、字は士庇、東郭はその号。別に青桐居士・

半九老人と号した。熊本の人。世々細川侯に仕えた。東郭若冠

上京し、外祖父、元田東野^{もとだとうや}の薫陶を受け、詩を森槐南^{もりかいなん}

に学んだ。のち鹿児島第七高等学校造士館教授、熊本第五高等

学校教授を経て、明治四十三年（一九一〇）冬、宮内省に入り、

内大臣秘書官となり、大正二年（一九一三）侍従に任ぜられ、

側近に奉仕すること十余年、挂冠の後、郷里熊本に退隠し、昭

和十七年二月、病歿した。歳七十六。詩を好み書を善くし絵に

長じ篆刻を巧みにし、暇あれば揮毫するを樂しみとした。人とな

り謹厳にして敦厚、その詩は七絶を好んだ。

と紹介され、神田喜一郎編『明治漢詩文集』（筑摩書房『明治文學全集』62、昭和五十八年）には中村忠行氏が作製された東郭の略歴が載せられていて、それには、

（慶應三二（一）説、二二・一一・一九―昭和一七・一・一九）

「名」爲誠「字」士應「別號」可窓夢讀騷人「出」肥後熊本の人。明治天皇の侍讀元田永孚（東野）の外孫。東郭の號は東野に因む。「歷」帝國大學文科大學選科に學ぶかたわら、大江敬香の愛琴吟社に詩を問ひ、星社結成後は之に加盟して森槐南の指導を受けた。森川竹礫とも早く訂交し、その誘掖によつて二十三年頃には填詞にも筆を染め、竹礫の『花影填詞圖』や『得間集』には題詩を寄せているから、二十四、五歳の頃には一角の詩人として自立していたことになる。卒業後、宮内省に出仕、また、第五高等學校・第七高等學校に教授したが、四十三年上京して大正天皇の侍従となり、天皇崩御ののちは宮内省圖書寮で傳記編纂の事に當り、昭和十一年熊本に隱棲、詩作三昧の生活を送った。その詩は王漁洋を宗とし神韻縹渺、餘情豊かな詩風で、當代屈指の名手とされた。

と述べられている。さらに落合東郭の郷里熊本で刊行された『熊本県大百科事典』（熊本日日新聞社、昭和五十七年）には、福田常三氏の執筆で次のごとく見える。

慶應二年（一八六六）十一月二十六日、昭和一七年（一九四二）一月十九日。侍従、漢詩人。名は爲誠、字は士應。託麻郡大江村（現熊本本市）生まれ。本山小学校で同級の徳富健次郎（蘆花）は『善人帳』の第一に挙げているが、長じて温厚謹嚴。東大卒業後、七高、五高の教授を経て宮内省に入り大正天皇の侍従を務めた。明治天皇の侍讀元田東野（永孚）は外祖父に当たり、

常にこれを敬慕して終生修養、致身の範とした。詩は森槐南に学び、温雅な作風で名をはせた。『愛冷吟草』などの詩集がある。この他、新版『漱石全集』第二十二卷（岩波書店、平成八年）に附された漱石書簡の「人名に関する注」（紅野敏郎氏作成）には、

落合東郭（1861-1932）漢學者・漢詩人。熊本県の生れ。本名は爲誠（のぶ）。東大選科卒業後、宮内省に入り皇太子（のち大正天皇）の傳育係をつとめる（その間熊本県飽託郡大江村の留守宅に漱石が住んだ）。のち五高、七高の教授をつとめたが、再び出仕して大正天皇の侍従となった。

と云う。

これらの記述には、生年や享年に一年のずれがあり、また職歴にも多少の差があつて、よくわからない点が多い。昭和十七年七十七歳で歿したというのは、あるいは荒木精之『熊本県人物誌』（日本談義社、昭和三十四年）の記述に因つたものであろうか。

ちなみに、永らく中京の地に在つて漢詩壇の孤壘を守り続け、昭和三十九年五月に九十八歳で亡くなつた擔風服部轍に「落合東郭を哭す」詩（富長蝶如編『擔風詩集』巻七、書藝界、昭和六十一年）があり、「二月十九日歿」と自注を附して、次のように詠じている。

辭都一旦掉頭還	都を辭して一旦	頭を掉りて還る	
初服多君臥故山	初服	君が故山に臥するを多とす	
壇坫齊名同甲子	壇坫	名を齊しくす同甲子	
屋梁落月認容顏	屋梁	落月	容顏を認む
翛然晚歲風騷客	翛然	たり晚歲	風騷の客
猶是前朝供奉班	猶	は是れ前朝	供奉の班
手攬遺篇思往事	手づから	遺篇を攬りて	往事を思ふ
不禁沾臆淚潸潸	禁ぜず	臆を沾して	淚潸潸たるを

○掉頭 唐・杜甫の「孔巢父の病を謝して帰る江東に遊ぶを送り兼ねて李白に呈す」詩（『唐詩選』）に「巢父は頭を掉りて肯て住らず、東のかた將に海に入りて煙霧に隨はんとす」と。人々がひきとめるのを頭を横にふるだけで、の意。○初服 仕官する以前の服。『楚辭』離騷に「進みて入れられず以て尤に離り、退いて將に復た吾が初服を修めんとす」とあり、後漢・王逸の注に「清潔の服」、清・蔣驥「山帶閣注楚辭」に「未だ仕えざる時の服なり」とする。○多りっぱだと思ふ。○臥故山 郷里に隠棲する。それは、唐・王維「送別」詩に「君言ふ意を得ず、南山の陲に歸臥せん」と言うのとは違つて、失意の帰隱ではなく、侍従という大任を果たされた上でのこと。○壇坫 語は『史記』魯仲連伝に見え、もとは会盟の場を言うが、ここでは漢詩壇。○同甲子 同い年。○屋梁云々 杜甫の「李白を夢む」詩二首其二に「落月屋梁に滿つ、猶ほ疑ふ顔色を見るかと」とあるのを踏まえる。○愴然 物事にとらわれず、さっぱりとしたさま。悠悠自適。『莊子』大宗師篇に「愴然として往き、愴然として来るのみ」とあるのに基づく語。杜甫「韋大夫之晋を哭す」詩に「尊榮真に忝しめず、端雅独り愴然たり」と。○風騷 もとは『詩經』国風と『楚辭』離騷とをいい、転じて詩文のこと。○前朝 大正の世。○供奉班 侍従の列。○沾臆 涙が胸元をぬらす。例えば、梁・沈約「夢に美人を見る」詩（『玉台新詠』巻五）に「那ぞ知らん神傷む者、潺湲として涙臆を沾す」、杜甫「哀江頭」詩（『唐詩選』）に「人生情有り涙臆を沾す」と。○澹澹 涙が流れるさま。

慶応三年十一月十六日生れの服部擔風が「同甲子」と述べていることからすれば、落合東郭の生年も当然その歳であらうし、それに何よりも東郭の墓がある熊本市京町の往生院の過去帳には七十六歳と記されていることから、慶応二年生れとするのは誤りであらう。

※このノートをまとめている間に、東郭の三男でかつて台北帝大教授、更に五高・熊本大学理学部教授を務め落合家を継いだ和男氏

（昭和四十五年歿）の夫人、熊本在住の落合秀氏から、幾つかの御教示を得ることができた。戦災や水害で失われた資料が数多くあるとのことながら、それによれば、落合東郭の生年月日は慶応三年十一月十九日で間違いない、明治十七年に上京して元田家に身を寄せ学習院に進んだ。二十二年九月帝国大学文科大学の選科生となり、国語漢文を修め、卒業後圖書頭井上毅のもとに雇となり、三十一年三月帰郷。四月済々黌中学教諭、三十三年五高の嘱託を受け講師に就任。三十六年九月七高教授、四十一年八月末五高教授に任ぜられた。四十三年明治天皇より永孚の身内の者を皇太子の傍に置きたいとの意向あり上京、内大臣秘書官となる。大正になって天皇の侍従を拝命、昭和二年退官、図書寮御用係となり、大正天皇の詩集編纂に携わる。その後、昭和十年に之を辞し、熊本に隠棲。それから、結婚したのは何時か不明だが、元田永孚の内孫を娶った由、つまりいとこ同士で結ばれたことになる。ちなみに東郭の長男は夭折し、次男の竹彦氏は元田家を嗣がれたという。

東郭の集は生前上梓されたものに、『可窓短述』（昭和三年）・『愛冷吟草』（昭和十四年）があり、歿後十六年をへて昭和三十三年七月に東繁穂氏により『燕歸草堂詩鈔』が刊行されている。このうち、『愛冷吟草』は明治二十八年八月、箱根塔沢に遊んだおり、依田学海（当時六十三歳）が宿泊していることを知って刺を投じ、学海およびその愛妾瑞香と応酬唱和した作を中心に収め、学海の「愛冷吟草引」（明治二十九年作）と題する序文が冠せられ、東郭の詩には森槐南の評語が附されている。また『可窓短述』は、已に「周甲」を迎えた東郭が「故郷の同人」の慫慂によって「今体詩百二十首」を鈔録したもの。これらの三集にはいずれにせよ、そのなかに中野逍遙との交流を窺わせる作は残念ながら一つも見当らぬ。

なお、東郭の蔵書はそのほとんどが現在、熊本大学図書館に寄贈されており、そのうち漢籍については、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センターから昭和五十五年に『落合文庫漢籍分類目録』が刊行されているが、邦人の漢詩文集についてのそれはまだない。

四

ところで、落合東郭が上京してから三十一年に帰郷するまでの間、即ちその東都遊学時代に、彼の名を頻繁に見いだすことのできる雑誌に「鷗夢新誌」がある。^(注9)これは明治二年生れの竹礫森川健蔵の主筆した漢詩の専門誌で、その第三十七集（二十二年二月）に「冒雨過湖上」詩が載せられているのをはじめとして、第四十集（二十二年五月）には「贈槐南先生。聊表欽仰之意。併請教」（槐南先生に贈る。聊か欽仰の意を表し、併せて教へを請ふ）詩二首を寄せている。そのなかで「美人香草風流の曲、思ふに堪ふ飛卿錦繡の腸」と槐南を富麗艷冶な耽美的詩風で知られ李商隠と並び称される晩唐の温庭筠（字は飛卿）に擬えているのに対して、槐南は「温李の清麗、固より槐南の希ふ所。然れども専ら此を以て槐南に求む、槐南豈に敢へてせんや。或いは鬼臉人を嚇す以て槐南を目する者有り、君の見る所と正に相反す。而して槐南も亦た豈に敢へてせんや」と評して、己が詩風の一面だけをとりえる見方に些か向きになって反駁しているのは興味深い。おそらくこれを契機に、東郭は槐南に親炙していったのではなかったろうか。時に槐南二十七歳。翌年の二十三年九月には年若い漢詩人達を糾合して星社を結成し、その盟主となるに至るが、東郭より僅か四歳年長にして既に鬱然たる大家であった。さらに、明治二十二年十月に創刊された森鷗外（当時二十八歳）

の主筆する月刊誌「^(文学)評論しがらみ草紙」の第三号（二十二年十二月）には、「山中雜詩」八首のうち二首の抄録と「温泉寺懷古」と題する一首を載せ、続く四号（二十三年一月）には、「謫天情仙」こと野口寧斎の「舞姫を讀みて」とともに「題小説舞姫後」（小説舞姫の後に題す）という七絶二首が掲げられている。

粉黛裙釵仙子粧 粉黛裙釵 仙子の粧
清歌妙舞姓名揚 清歌妙舞 姓名揚がる
一朝離別眞身苦 一朝離別 眞に身苦しむ
誰謂人生亦戲場 誰か謂ふ人生も亦た戲場と
○粉黛 おしろいとまゆずみ。○裙釵 裳裾とかんざし。○仙子 仙女。唐・白居易「長恨歌」に「楼阁玲瓏として五雲起こり、其の中に綽約として仙子多し」と。○清歌妙舞 唐・劉希夷「白頭を悲しむ翁に代はる」詩（『唐詩選』）に「公子王孫芳樹の下、清歌妙舞落花の前」と。○戲場 劇場、舞台。人生を舞台に喩える言い方については、有名なのはシェークスピアのそれで「お気に召すまま」にみえるが、明清にも似たような表現がある。このことについては合山究氏に「明末清初における『人生はドラマである』の説」（『荒木教授退休記念中国哲学史研究論集』、昭和五十六年）という論文がある。

湘管一枝寫泪痕 湘管一枝 泪痕を写す
讀来我亦欲銷魂 讀み来たつて我も亦た銷魂せんと欲す
深沈簾幕寒如水 深沈たる簾幕 寒きこと水の如し
夜雨瀟々鐙影昏 夜雨瀟瀟 鐙影昏し
○湘管 湘竹で作った筆の管。転じて筆をいう。例えば、南宋・許棐の「後庭花」詞に「雨窓涙と和に湘管を揺らす、意長く箋短し」と。なお、湘竹には、古代の聖王、舜の死を悼んだ二人の妃、娥皇と女英の両姉妹が流した涙の痕がそのまま染み附いて残っていると

いう伝説がある。○銷魂 悲しみのあまり腑抜けの状態になること。『文選』卷十六、梁・江淹「別れの賦」に「黯然として魂を銷す者は、唯だ別れののみ」と。○深沈 奥深くひっそりとしたさま。晷韻の語。例えば、『文選』卷二十一、劉宋・謝靈運「晩に西射堂より出づ」詩に「青翠は香として深沈たり」と。○瀟瀟 雨のしめやかに降るさま。もとは『詩経』鄭風・風雨に見え語。その場合は、激しく降る雨。○燈影 燈は燈と同じ。

これらの詩は、さながら旧来の才子佳人小説の読後感を記したもののようで、今読むとさほど新鮮味も感じられないが、ただ漢詩それも七絶で表現しようとするという形にならざるを得ないのかもしれない。

その後も「しがらみ草紙」には累号、東郭の詩が載せられ、第六号（二十三年三月）には「贈紅葉山人」と題する七言律詩があり、第十三号（二十三年十月）には同じく七律で「得漣山人書却寄。山人時在湘南」（漣山人の書を得て却つて寄す。山人時に湘南に在り）という詩が見える。尾崎紅葉は慶応三年十二月生れで東郭と同年だが、前年四月すでに出世作となる『二人比丘尼色懺悔』を刊行し、新進作家としてその地位を確立していた。

山人名姓壓詞場	山人の名姓 詞場を圧し
匹似陸機驚洛陽	陸機の洛陽を驚かすに匹似す
托月烘雲描思遠	托月烘雲 描思遠く
裁紅暈碧惹情長	裁紅暈碧 惹情長し
百年老鶴憐清唳	百年の老鶴 清唳を憐れみ
滿室天花愛妙香	滿室の天花 妙香を愛す
好酌鎧前一樽酒	好し酌まん鎧前一樽の酒
寸心得失細商量	寸心得失 細かに商量せん

○詞場 文壇。○匹似 唐代からの俗語で、たとえば「のごとし、さも似たりの意。○陸機 三国呉の人（二六一〜三〇三）。呉の滅亡後、晋の都洛陽に出て、張華（二三二〜三〇〇）からその詩文を称えられた。西晋時代、潘岳（二四七〜三〇〇）と並び称される文学者。○托月烘雲 周りに雲を描くことによって月を際立たせる。もと月を描く手法の一つ。他のものを配することによって描きたいものを際立たせること。○裁紅暈碧 きらびやかな言葉を用いること。例えば、明治十一年刊『清廿四家詩』所収の錢謙益「春尽日、士龍の韻に次す」詩に「暈碧裁紅 故事を成す」とある。○惹情長 余情が尽きない。○百年老鶴云々 その老練な筆致を譬えて言うのである。清唳は、遠くまで聞こえる鶴の鳴き声。○滿室天花云々 華麗な表現を譬えて言うのであろう。天花、妙香の語は『唯摩經』に見える。○鎧前 鎧は燈と同じ。○一樽酒 杜甫の「春日李白を憶ふ」詩に「何れの時か一樽の酒、重ねて与に細かに文を論ぜん」と。○寸心得失 杜甫の「偶題」詩に「文章は千古の事、得失寸心知る」と。得失は作品のよしあし。○商量 はかり考える。議論する。

これは紅葉山人に対するほんの挨拶代わりといった程度の作品であって、二人の關係はさほど親密でないような印象を受けるのだが、それに比べると三歳年下の巖谷小波との交わりはもう少し深かったように思われる。

珍重廻潮錦字章	珍重す廻潮錦字の章
纏綿堪讀寄情長	纏綿として読むに堪へたり寄情の長きを
鮫珠的々探蒼海	鮫珠的 蒼海を探り
江竹蕭々弔碧湘	江竹蕭蕭 碧湘を弔ふ
廟裏瑤琴神女怨	廟裏の瑤琴 神女の怨み
夢中環佩玉郎裝	夢中の環佩 玉郎の装ひ
可憐羅幃星々影	憐れむ可し羅幃星々の影

明月微波水一方 明月微波 水的一方

○錦字 後秦の蘇若蘭は回文詩を織り成して遠く旅上にある夫に寄せたという。転じて手紙のこと。○鮫珠 人魚の流す涙の粒。真珠をいう。『述異記』に「南海中に鮫人の室有り、水居すること魚の如し。機織を廃せず、其の眼能く泣く。泣けば則ち珠を出だす」と。○的々 白く輝くさま。○蕭々 さわさわと葉が擦れる音。○碧湘 あおおとした湘江。湘江(湘水)は洞庭湖に注ぐ川で、舜の二妃、娥皇と女英が帝の崩御をきき身を投じて死んだとされている。その際二人が舜の死を悼んで流した涙の痕が竹について残ったという。それを踏まえて例えば、唐・李白の「族叔刑部侍郎曄及び中書舍人賈至に陪して洞庭湖に遊ぶ」詩(唐詩選)には「日落ちて長沙秋色遠く、知らず何処にか湘君を弔はん」とある。わが国では江戸の護国派の詩人達以来、相模川のことを中国風に湘江・湘水と称する。○廟裏 廟は、江の島の弁財天を祀った祠を指すのであろう。○瑤琴 玉で飾った琴。琴の美称。○玉郎 唐・李商隠の「重ねて聖女祠を過る」詩に「玉郎会す此に仙籍を通せん」とあり、仙界で仙人に仕える官。ここでは、小波が見た夢の中で彼自身その姿に変わっているとも考えられる。○羅幃 薄絹の靴下。『文選』巻十九、魏・曹植「洛神の賦」に「波を凌いで微歩すれば、羅幃塵を生ず」と。○星々 さらさら光るさま。○水一方 『詩経』秦風・蒹葭に「所謂伊人は、水的一方に在り」と。

小波の「庚寅日録」によれば、硯友社の面々、川上眉山・尾崎紅葉・江見水蔭らとともに、四月三日から七日まで江の島に行き金亀楼に逗留しており、また八月二十二日から二十五日まで腰越片瀬村(現在、藤沢市の一部)の柏屋に宿泊して海水浴を楽しんでいる。そのいづれかの間に、かかるやりとりがあったものらしい。恋しい女性のことを夢にみたとでも書いて寄越したのであろうか。小波はこの当時、父一六——書家として著名だが古梅と号する漢詩人(注11)でもあつ

た——の紹介で日曜ごとに森槐南のもとに通い、『西廂記』や『紅樓夢』の講義を受けている。あるいはこうしたことも東郭と親交を深める機縁になったのかも知れない(注12)。

このほか、森槐南の「送落合東郭^{為誠}游相州」と題する七律(『槐南集』巻十二)もこの明治二十三年に作られており、またこの年の夏三カ月あまり体調を崩し病床に臥していた森川竹磧には「病起懷人」(病より起きて人を懷ふ)詩二十六首の作があつて「鷗夢新誌」第五十三集(二十三年十二月)に載せられているが、その中に森槐南・矢土錦山・永坂石埭・国分青崖・野口寧齋・本田種竹・大久保湘南・宮崎晴瀾・佐藤六石・高野竹隠・岩溪裳川・関澤霞菴・神波即山・横川唐陽^(注13)さらには清人孫君異(點・張袖海(滋昉)らと並んで、其十三に落合東郭の名が見え、

間裏填詞韵也諸 間裏の填詞 韻也た諸^{かな}ふ

瀟瀟灑灑是風懷 瀟瀟灑灑是れ風懷

晃山絶句餘靈在 晃山絶句 餘靈在り

比似金陵十二釵 比似す金陵十二釵に

○間裏 暇なとき。○填詞 唐の中頃に於て五代を経て宋代に大成された文学様式、(詞)のこと。譜に合うように文字をうずめて歌詞を作るのでかく称する。○瀟瀟灑灑 さっぱりとして俗離れしているさま。杜甫の「飲中八仙歌」に「崔宗之という貴族の子弟について「宗之は瀟灑たる美少年、觴を挙げて白眼に青天を望む」と。○晃山 日光山のことを中国風にいう。東郭に「晃山雜詩」十二首があり、後に「しがらみ草紙」三十二号(二十五年五月)に載せられた。○餘靈 十分に靈妙であること。○金陵十二釵 金陵は南京の古称。十二釵は十二人の才媛。なお、『紅樓夢』の別名を金陵十二釵ともいう。

と詠じられている。ちなみに森川竹磧については、神田喜一郎博士

の『日本における中国文学Ⅱ——日本填詞史話下——』（同朋舎）「神田喜一郎全集」第七巻）に於いてわが国有数の填詞作家として高く評価されその事績が詳叙されており、水原渭江氏によって『聴秋仙館詩稿』『聴秋仙館詞稿』が刊行されている（但し、後者は未見）。その誘掖によつて東郭も填詞に手を染めたいらしい。また明治二十四年四月に竹篔が『得間集』を上梓した際、東郭は「題森川竹篔得間集」七絶四首を『鷗夢新誌』第五十八集（二十四年五月）に載せている。こうしてみると、中村忠行氏が言われるように、彼が二十四・五歳頃には充分ひとかどの詩人として認められ、旺盛な活躍をしていたのである。

さらに「鷗夢新誌」第六十集（二十四年七月）には、その年の六月、上京後おそらくは初めての帰省で熊本に向かう東郭を送った森槐南が「送落合東郭歸熊本」詩を寄せている。これは後に野口寧斎の同題の詩とともに「しがらみ草紙」第四十七号（二十六年八月）にも転載された。なお、「しがらみ草紙」の同号には東郭の「官暇將歸省留別諸同人」詩四首が載せられ、四十八号（二十六年九月）に森槐南の「送落合東郭歸里用其留別韻」四首と関澤霞菴の同題の詩が掲げられている。このうち、槐南の「送落合東郭歸熊本」詩を示しておく。ここには、颯爽とした東郭の風姿が次のように詠じられている。

君家外祖公輔量	君が家の外祖は公輔の量
主知特達嘉勤讓	主 特達を知り勤讓を嘉す
鶯花富貴開畫堂	鶯花富貴 画堂を開き
文采風流映絳帳	文采風流 絳帳に映ず
至尊聽講屢歎嗟	至尊聽講 屢しば歎嗟す
而今松柏鬱新墳	而今 松柏 新墳に鬱たり

尙想姿儀朗照人	尙ほ想ふ姿儀 朗らかに人を照らすを
諸孫乃見朝霞狀	諸孫に乃ち見る朝霞の状
君也翩翩尤軼群	君や翩翩 尤も軼群
葩流才藻吹蘭芬	葩流才藻 蘭芬を吹く
五陵年少游俠子	五陵の年少 游俠子
艷君衣袖不須薰	君を、艷む衣袖薰ずるを須ひざるを
洛陽美女花窈窕	洛陽の美女 花 窈窕
乞君手書白練裙	君に乞ふ手づから白練の裙に書せんことを
君以清門能自重	君は清門を以て能く自重し
掉頭直指鎮西雲	頭を掉りて直ちに指す鎮西の雲
驪歌爲唱河梁柳	驪歌 為に唱ふ河梁の柳
祖塋先醉夕陽酒	祖塋 先づ酔ぐ夕陽の酒
當時禮數儒臣優	當時 札数 儒臣優れ
祇今氣誼詩盟厚	祇今 氣誼 詩盟厚し
明日阿蘇山翠新	明日 阿蘇 山翠新たなり
有一青衫躍馬走	一青衫有りて馬を躍らして走る
詢是東塾先生孫	詢に是れ東塾先生の孫
滿城士女一回首	満城の士女 一たび首を回らさん

○外祖 元田永孚（文政一八八八—明治二四）のこと。東野はその号。熊本の人で、その学は程朱を主とし、明治天皇の侍講を務め、同じく熊本出身の井上毅（号は梧陰。弘化一八四四—明治一八八九）とともに教育勅語の草案を作った。明治二十四年一月二十二日歿。享年七十四。○公輔 三公四輔。『漢書』孔光伝に「入りて四輔と称し、出でて三公に備ふ」と。天子を輔佐する大官。○量 器量。○特達 群を抜いてすぐれていること。『札記』聘義に「圭璋特達」とあるのに基く語。○勤讓 へりくだりとめる。○鶯花富貴 元田東野がその書屋につけた号か。東郭に「鶯花富貴堂の壁に題す」詩（『鷗夢新誌』第五十九集）

があり、竹篠に「東郭の鶯花富貴堂題壁詩を読み、戯れに原韻に次して以て贈る」詩がある。○画堂 さらびやかな邸。○文采風流 文学や藝術などの風雅の道。杜甫の「丹青引 曹將軍霸に贈る」詩（『唐詩選』）に「英雄割拠已んぬと雖も、文采風流今尚存す」と。○絳帳 後漢の大儒、馬融が教授する際、常に高堂に坐し、絳紗帳を施し、前に生徒に授け、後に女衆を列し「ていたという（『後漢書』馬融伝）。そこから転じて講席のこと。○歎嗟 感嘆する。○松柏 墓地に植えられる木。○新墳 まだ新しい墓。墳は、墓穴の意。なお、永孚の墓は東京・青山墓地にある。○朝霞 あさやけ。霞は赤い雲気。『世説新語』容止篇に、「唯だ会稽王来たらば、軒軒として朝霞の華がるが如し」と。容姿すぐれた人が現われると、あたりがぱっと明るくなることをいう。○翩翩 『文選』卷十一、魏・曹丕「吳質に与ふる書」に「元瑜は書記翩翩として、致き樂しむに足る」と。美しく文雅なさまをいう。○軼群 群を抜く。軼は逸と同じ。○葩流才藻 すぐれた詩才。葩は花、華やかな意。唐・韓愈の「進学解」に「詩は正にして葩」という。○蘭芬 蘭の香。ここでは美しい詩文に喩える。○五陵年少 五陵は唐の都長安の郊外の地。その周辺に漢代五帝の陵墓があるので、かく称する。この地域には富豪の家が多かった。年少は若者。例えば、唐・白居易「琵琶行」に「五陵の年少争つて纏頭し、一曲に紅綃は数を知らず」と。ここでは、明治の東京をいうのに舞台を唐の長安に借りて表現している。次句の「洛陽」の場合も同様。○游侠子 男伊達を気取るいなせな若者。例えば、唐・高適の「邯鄲少年行」（『唐詩選』）に「邯鄲城南遊俠子」と。○艶 羨む。○窈窕 ひとやかなさま。晝韻の語。『詩經』周南・閟風に「窈窕たる淑女」と。○清門 名門。例えば、杜甫の「丹青引」に「將軍魏武の子孫、今に於いて庶と為るも清門なり」と。○掉頭 人々がひきとめるのを頭を横に振るだけで、の意。前掲、服部擔風「落合東郭を哭す」詩参照。○鎮西 ここでは熊本を指す。○驪歌 送別の歌。『漢書』王式伝に「歌吹の諸生に謂ひて

曰く、驪駒を歌へ」とあり、服虔の注に「逸詩の篇名なり。大戴礼に見ゆ。客去らんとして之を歌ふ」、文穎の注に「其の辞に云はく、驪駒門に在り、僕夫具に存す。驪駒路に在り、僕夫駕を整ふ」と。○河梁 河に架けた橋。『文選』卷二十九、漢・李陵の作とされた「蘇武に与ふ」詩三首其三に「手を携へて河梁に上る、遊子暮れに何くに之く」とあるのに基き、送別の地をいう。なお、柳も別離には缺かせない。唐代、送別に際し、無事に帰ってくるようにとの願いを込めて、柳の枝を手折り環にして旅立つ人に贈った。○祖塋 祖先の墓。○酌 酒を地に注いで祖靈を祭る。○禮數 礼節。古来、礼をもつて天子を薫陶するのは儒者の務めで、東郭の外祖父元田永孚も謹直な儒者として宮中に仕えた。○氣誼 意気と情誼。○詩盟 詩人の交わり。○青衫 青色の服。下級官吏の服。白居易「琵琶行」に見える。○満城 町中。○回首 振り返る。

これまで、落合東郭の漢詩壇での活躍ぶりについて、それが明治二十二年に始まることを指摘し、「鷗夢新誌」や「しがらみ草紙」所収の作を中心にその一斑を見てきたが、彼には温雅な君子人ともいった一種の風韻が備わっていたばかりでなく、瀟洒で闊達な一面を有した人であつたように思われる。

なお、明治二十五年十一月発行の「鷗夢新誌」第七十四集には、東郭の「古七夕賦示内子」（古七夕、賦して内子に示す）と題する七絶二首が載せられており、その詩を槐南が「燕爾新婚、情深如海」（爾の新婚に燕んで、情深きこと海の如し）云々と評していることからすれば、この歳の六七月頃には妻を迎えたいらしい。

五

それでは、このように落合東郭が漢詩人として着々と地歩を固めていくのに対して、中野逍遙の方はどう見ていたのであらうか。

もし望むなら逍遙が「吾が心を知る者は其れ唯だ慈君か」としてずっと交わることのない信頼を寄せた文科大学の外国人講師張滋昉（字は袖海、鮑翁と号した。『慈淚餘滴』の緒言に見える慈君というのも彼のことである。また後に『逍遙遺稿』に序文を書いた）、この人は槐南・寧斎・竹磾らとも交際があつたから、彼を介して星社の詩人達と知合うことはできたはずであるし、落合東郭を通じて交流することも可能であつたにも関わらず、槐南や寧斎らの華々しい活躍ぶりを横目にみながら、彼らのグループに加わろうとしなかったばかりか、明治二十七年正月、「骨髓の病」をいやすべく熱海に逗留していたとき、信州に帰省している月山子高橋作衛に寄せた「新春書感、寄信州高橋月山子。長篇一首」（『逍遙遺稿』外編）のなかに、

詩宗學伯除二人

詩宗學伯 二人を除けば

紛々諸子如蚊虻

紛々たる諸子 蚊虻の如し

小言詹々才是街

小言詹々 才是街ふ

不是幫間即優倡

是れ幫間ならずんば即ち優倡

怪槐南又妖騷齋

怪槐南又た妖寧齋

惑亂詩道汙文場

詩道を惑亂し文場を汚す

我際盛世膺奎運

我れ盛世に際し奎運に膺り

竊嘆斯文之頽唐

竊かに斯文の頽唐を嘆ず

と槐南・寧斎の二人を槍玉にあげて痛烈に批判している箇所がある。ちなみに、〈詩宗〉は蒼海副島種臣を言い、〈學伯〉とは篁村島田重

禮を指す。この詩については前稿「『逍遙遺稿』札記——高橋白山・

月山のこと他——」において取り上げたが、その際述べたように、逍遙からみれば、さして年も違わぬ二人の活躍ぶりは徒に才を銜うばかりで、政府高官に取り入りながら宴席に侍る幫間か役者風情の如くに思われたのだらう、なによりも彼らに志の高さを見いだすことができなかった。西洋にも眼を向け英書を読み疾風怒濤期を生きた独逸の詩人シラーに傾倒する一方で、逍遙には支那文学の研究を通して斯文の伝統を保持し東亜文明を宣揚したいという悲願があつた。その目的に向かつては孜孜として學問に打ち込まねばならず、いづれ文界の指導的立場に立つことを夢みはしても、ただちに今の漢詩壇に打って出て己れの詩才を発揮したいとは思わなかったのかもしれない。さらに臆測すれば、逍遙がその指導を受けた文科大学教授島田重禮は漢詩壇と距離を置いていた学究一途の人であり、まだ學問の未熟な学生が詩人として世に出ることをあまり喜ばなかったのではなからうか。そのためかどうかは判らぬが、彼の詩文はその生前、郷里の宇和島青年会の機関誌「鶴城青年」に掲載されたという「房総漫遊小記」や明治二十七年十一月三日、田岡嶺雲・藤田劍峰・小柳司氣太らの手によつて創刊された「東亜説林」第一号に載せられた「九州漫筆」などほんの一部を除いて、ごく少数の身近な友人達に示されたにすぎなかった。

その逍遙のほとんど絶筆ともいうべき作品「幽憤の賦」(『逍遙遺稿』正編)のなかに、

彼切々之交兮

彼の切々の交

斷臂之睦

斷臂の睦

黄金嚮背兮

黄金嚮背し

雲雨翻覆

雲雨翻覆す

棄十年之竹馬兮

十年の竹馬を棄て

阿一朝之紳笏

一朝の紳笏に阿る

という友情の断絶を嘆く箇所があるのは、東郭との関係をみてゆく上で注目すべきだろう。

「切切」は『論語』子路篇に「朋友には切切偲偲」とあるのに基き、「断臂」は五代周・王凝の妻李氏が他人からつかまれたうでを断ち切つて貞節を示した故事に拠り、「雲雨翻覆」は杜甫が薄情な世の中にあつて友情の持続の難しさを嘆じた「貧交行」の「手を翻せば雲と作り手を覆せば雨」を踏まえている。中野逍遙が「十年之竹馬」である己れを見捨てて、今を時めく政府の大官にすりよつていつたと見做している人物は、「竹馬」を文字通り幼友達と解すれば、彼の故郷宇和島出身の者ということになるが、どうもそうではなく、「十年」というのは逍遙が十七歳で上京して以来の期間を指すように思われる。そうすると落合東郭のことを念頭に置いてこのような言を發したと考へても不自然ではなからう。

二十歳の頃には「韻雅ヲ以テ相合フ」の士として、その一文一詠を互いに回覧批評し合つていた逍遙と東郭であつたが、東郭が星社の詩人として名を知られるようになった頃には、すでに二人の間にはかなりの齟齬懸隔を生じるようになっていつたのではなかつたか。それは逍遙から見れば、東郭が自分を棄てて、今を時めく槐南一派に付き権勢に阿つていつたように思われたのであろう、それ故、かかる表現がなされたのではあるまいか。もつとも、東郭が詩壇で活躍するのは先に見たように明治二十二年頃からで、その時には黙して何も言わず、二十七年になつてからこのように述べているのにはそれなりの理由があるように思われる。というのも、この当時、中野逍遙は三年越しに恋い焦がれていた南条貞子への想いが彼女の結

婚によつて終に叶わず、一旦はその人を死んだものとして断念しようとしたものの、諦めようにも諦めきれない心が未練執着となつて、その悲鳴絶叫とも言うべき詩賦を書き綴つていたのである。我が苦しい胸の内を誰ひとりとしてわかってくれぬと懊惱憂悶し、天の善意を疑い人間不信の激語さえ洩らすようになった彼の目には、進む途を異にし何時しか疎遠になつていつた友人であつても、かつては心許し己が真心を尽くしたことがあると思へば、それは自分を裏切り見捨てゐる行為のように映つたに違ひなく、だからこそかかる言葉が吐かれたのであろう。そして逍遙の歿後、その遺稿編纂の任にあつた逍遙の学友達もこのような事情に薄々気づいていて東郭に釀金等を依頼するのを憚つたか、あるいは最初から念頭に置かなかつたのかもしれない。

以上、甚だ浅薄で不充分ながら、この札記では、中野逍遙と落合東郭との交友について、その一端を見てきた次第である。

* * *

最後に、今回、落合東郭の詩が載せられている漢詩雑誌を探しているうち、「精美」第三十九号（明治二十七年十一月二十五日発行）の雑誌・彙報欄に無署名ながら次のような記事があるのに気づいたので、茲に紹介しておきたい。ちなみに、「精美」は敬香大江孝之（（安政四）一八五七—（大正五）一九一六）が關係していた雑誌で、この一文は彼の筆によるものであるうか。

●中野重太郎氏逝く 西風搖落風物凄寥たり愁人は將に情に堪へざらんとす此時に當りて知己の訃音に接す斷腸九回せざらんと欲するも得んや中野重太郎君は宇和島の人なり本年七月帝國大學を卒業して文學士の稱號を受く大學文科に漢文科を置

てより漢學を専修せし者實に君を以て嚆矢となす業を卒へてより數閏月はより漸く滿腹の知識を以て事に従はんとするに方り肺炎と心臟病とに罹りて藥爐に伴ふこと一週日に充たず友人等君が病めるをだも知らざる者ありしに本月十六日溘然薨を易へて幽冥の人となる計を聞て驚かざる者なし吾輩深交にあらずと雖も仰て旻天の假年に客なるを恨ますんはあらざるなり傷ましい哉君人と爲り幽憂沈鬱特に詩文に長ず本月三日君等主張する所東亞説林第一號出づ中に君が九州感懷十二律并引を録す曰く百年倏忽。紅顏破碎。花月忽々逐之何及。悲哉吾生之孤寂。累々乎其憐_レ于無_レ處_二適歸_一矣。東望_二武州_一。佳人似夢。風露半銷。殘月在_レ軒。傷_二舊會之莫_レ續_一。而悲_二聚散之無_レ定_一。紅桃三日。碧萍一夕。況茫々浮世。漠々塵界。人情之嶮甚_レ于_二峻坂_一。世風之澆過_レ于_二薄氷_一者乎。嗚呼人已不_レ可_レ賴。我亦不_レ可_レ倚。朽者下而混_二土芥_一乎。不_レ朽者上而從_二星辰_一乎。知_レ我者其唯天耳。

と君は終に塵界の人にあらざるなり人生の最快事に逢ふも尙ほ且つ沈黙して情海の波に感じ双袖の沾に禁へざる者とは自ら能く自己を知るの言なり噫嘻君が多感多情は浮世紛々の徒と同處すべきにあらず

逍遙子朗_二呼大_一笑于_二九地之下_一也。

とは實に君が現世の人にあらざる悲絶の懺文なりしなり哀哉

注

(1)

このことは、次の諸論考に指摘されている。
笹淵友一『文学界とその時代 下』第十章「中野逍遙」

(昭和三十五年、明治書院)

越智治雄「東海散士の系譜(ノート)」

(昭和三十六年、「共立女子大学短期大学部紀要」第五号。後に岩波書店『近代文学成立期の研究』所収)

前田愛「中野逍遙」

(原題「明治の漢詩」。昭和四十八年、右文書院刊『講座 日本現代詩史——明治期』。後に新曜社『近代日本の文学空間』所収)

箕輪武雄「中野逍遙論」

(昭和五十三年、「日本近代文学」25)

(2)

正岡子規「筆まか勢」第一編「生徒の尊称」による(講談社版『子規全集』第十巻)。これは、第一高等中学校二年三之組で級友たちが黒板に楽書した互いの人物評を子規が書き写しておいたもの。

(3)

川崎宏氏、前掲書152頁によれば、落合東郭の評語というのは次の如くである。

子細商量遊賞趣一分山水一分坂朗廬之句也。予於此篇云爾。

丁亥秋十月念三

弟 東郭散士 拜

「丁亥秋十月念三」は、明治二十年十月二十三日。東郭が引いているのは、阪谷朗廬(文政五〜明治四)の「鎮西発氣稿」の中の「途上吟」と題する七絶五首のうち其二の後半二句である。ここに国会図書館所蔵の明治二十六年刊『朗廬全集』からその詩を挙げておく。

丘壑從來無語言 丘壑 從來 語言無し

憑依良士發精神 良士に憑依して精神を發す

子細商量遊賞趣 子細に遊賞の趣を商量すれば

三分山水七分人 三分は山水 七分は人

この「途上吟」には「壬戌九月十三日出郷」という自注が附されており、文久二年(一八六二)朗廬四十一歳の時の作になる。

なお、阪谷朗廬の評伝として、山下五樹氏の『阪谷朗廬の世界』(岡山文庫177、日本文教出版社、平成七年)がある。

(4)

荒正人『増補改訂漱石研究年表』(昭和五十九年、集英社)明治三十

一年三月の条。

(5) なお、『燕歸草堂詩鈔』には、服部擔風が「東郭仁兄を懷ふ有り」として次のような題詩を寄せている。

詩名 早歲 東関を動かし
標置槐門四傑間 槐門四傑の間に標置す
學派青箱傳祖業 學派青箱 祖業を伝へ
世途白髮臥家山 世途白髮 家山に臥す
我慚下里巴人調 我は慚下里巴人の調
君是先朝侍從班 君は是れ先朝侍從の班
同甲于今傷後死 同甲 今に于いて後死を傷む
身遭鼎革泣時艱 身は鼎革に遭ひ時艱に泣く

○東関 関東。東都をいう。○標置 高く拔きんでる。○槐門四傑 森槐南の四人の高弟。ちなみに、辻揆一「明治漢詩壇展望」(昭和十四年二月「漢學會雜誌」掲載、のち筑摩明治文學全集『明治漢詩文集』に転載)には、槐南門下の四天王として野口寧斎・大久保湘南・佐藤六石・宮崎晴瀾の四人を挙げ、これは国分青厓の定めたものと云う、とある。○青箱 南朝・宋の王准之の家は代々江左の旧事を諳じていたが、その文書を青箱に緘していたので、世人がこれを王氏の青箱学といったという故事に基づく(『宋書』王准之伝)。○下里巴人 田舎じみた野暮な歌曲。『文選』卷四十五、宋玉「楚王の問いに對す」に見える。○鼎革 ここは昭和二十年の敗戦と戦後の混乱期を指している。『易』雜卦伝に「革は故きを去るなり」、「鼎は新しきを取るなり」とあるのに基づく語。

(6) 平成三年、岩波書店から刊行された『学海日録』第十卷、明治二十八年八月十八日の条に、「塔沢に在りしとき、文書局の属僚にて、熊本人落合東郭誠にあふ。この人、年は廿五、六なれども、詩を善し、余が名をかねてき、知り、詩を贈らる。海内文章煒月旦、山中風物足娛遊句あり。余を追ふてこゝに來宿し、ともに唱和數篇に及

ぶ」云々とみえる。ここに挙げられている東郭の詩句は、『龍雲館賦呈依田学海翁』と題する七律の頷聯(『愛冷吟草』所収)である。また、漢文で書かれた『墨水別墅雜錄』(今井源衛校訂、吉川弘文館、昭和六十二年刊)明治二十八年八月十七日の条にも「熊本人落合為誠來宿、余婢の言を聞き、是れ落合直文かと疑ひ、往きて之を見れば則ち為誠也。為誠は東郭と号す。余特だ其の名を知り、未だ其の面を見ざりし也。是に於て其の奇遇を喜びて去る」と、その初対面の様子を記している。

(7) ここに依田学海の引を書き下して挙げておく。

丙申九月、余、暑を墨水の別墅に避く。荷花香を送り涼氣水の如し。乃ち婢に命じて箏を弾ぜしむ。松風謾謾として其の調べに和する者の如し。之を平時に比ぶるに稍や趣味多し。偶たま友人落合東郭訪はる。出して其の愛冷吟草を示す。蓋し客歲八月大磯函山等に遊びし作に係る。余、時に亦た東郭に客舎に逢ひ、盤桓すること數日、唱和して數首を得。今、卷中に載せる者は是れなり。余、老いて読書作文に耽るも、詩を專攻すること能はず。偶たま興に触れて発するも、殊に韻致に乏しく、屢しば朋輩の鍼砭する所と為る。東郭は年少氣鋭、加ふるに鍛鍊を以てし、頗る王新城の風有り。此の卷に収むる所七律最も妙。蓋し草木泉石、藉りて以て詩資に充て、胸中の蘊蓄を發し、自然の節奏を成すこと、猶ほ箏を弾き松風の之に和するがごとし。宜なり其の音韻の曲折致き多きや。老慙余輩が如きの企及する所に非ず。感歎之餘、書して以て引と為す。

東京学海居士依田百川

王新城は、漁洋山人と号した清の王士禛(一六三四〜一七一一)のこと。山東新城の人であるので、かく称する。(『神韻説』を提唱し、その詩風は淡泊清麗にして餘情に富むとされる。)
(8) ちなみに、その序文には東郭の生卒年を一八六六〜一九四二としている。

(9) もつとも、今回は東京大学の明治新聞雑誌文庫所蔵の分しか閲覧することができなかった。但し、明治二十二年九月発行の第四十四集などたしかに缺号もあるが、明治二十二年から二十八年にかけての各集は概ね揃っている。

(10) 筑摩書房『明治文學全集20川上眉山・巖谷小波集』所収。その漢詩集に『一六遺稿』(明治四十五年刊)がある。

『燕歸草堂詩鈔』には、「含輝樓賦呈巖谷古梅翁。翁曾選吳澹川詩、載在清朝二十四家選本。因用其秋江釣韻」と題する詩が収められている。ちなみに、明治十一年刊の『清廿四家詩』に採られた詩人と其の選者を示すと次の如くである。

〔卷上〕錢牧齋詩(北川雲沼) 吳梅村詩(鷺津毅堂) 宋荔裳詩(鈴木蓼處) 施愚山詩(小永井小舟) 王漁洋詩(長三洲) 趙秋谷詩(伊藤聰秋) 尤西堂詩(森春濤) 朱竹垞詩(広瀬青村) 〔卷中〕陳迦陵詩(神波即山) 黃莘田詩(関雪江) 查初白詩(日下部鳴鶴) 厲樊榭詩(江馬天江) 巖海珊詩(長松秋琴) 袁簡齋詩(大沼枕山) 錢璣石詩(野口松陽) 王穀原詩(谷太湖) 〔卷下〕蔣臧園詩(鱸松塘) 王夢樓詩(徳山樗堂) 趙甌北詩(小野湖山) 吳穀人詩(岡本黄石) 吳澹川詩(巖谷一六) 張船山詩(成島柳北) 陳碧城詩(永坂石埭) 郭頻伽詩(丹羽花南)

なお、大正四年六月に森川竹磻の鷗夢吟社から刊行された『明治名詩鈔』にも一六の詩が採られている。これも参考までに、そこに選ばれた詩人と選者の名を挙げておく。

橋本芙塘詩(上夢香) 森槐南詩(落合東郭) 森春濤詩(永坂石埭) 岡本黄石詩(福井字圃) 副島蒼海詩(森川竹磻) 大久保湘南詩(土居香国) 野口寧齋詩(田辺碧堂) 北条鷗所詩(高島九峰) 長三洲詩(関澤霞庵) 本田種竹詩(澤野江舟) 巖谷一六詩(岩溪裳川) 神波即山詩(永井禾原)

(12) 明治二十三年の「庚寅日録」六月廿九日(日)の条に「午後落合東郭氏來る」、七月六日(日)の条に「落合氏來、共に森氏へ行」と

ある。「森氏」は槐南のこと。以後、八月三日(日)、九月十四日(日)の条などにもその名が見える。

(13) これらの詩人については、神田喜一郎編『明治漢詩文集』に附された中村忠行氏作製の略伝参照。

(14) 神田喜一郎博士の『日本における中國文學Ⅱ——日本填詞史話下』(八十五) 竹磻の送行詞三関(二)には、東郭が慶応三年生れであることが明記され、明治二十四年の帰省について、その年の二月に元田東野が歿したのと何か関係があったのであろうか、と述べられている。

なお、この時の東郭の帰省と関連すると思われる資料に、岩波書店『鷗外全集』第三十六卷(昭和五十年三月)所収の落合東郭宛て書簡(番号四四)がある。これは日附があるのみで年月不詳ながら、「拜讀八年前にはなれし郷に歸り玉ひての景況さもあらむとおもはれ中には好詩料もあるべしと羨申候」云々と記されていることからして、けだし、東郭の手紙には明治二十四年六月から十月初めまでの帰省の際に郷里での見聞を報じた内容が書かれていて、それに対する返信であろう。

また明治二十五年一月二十三日附の東郭宛て書簡(四五)には、「柵」二十八号が出来たことを報じ、「連に御あひなされ候は、よろしくと御つたへ下され度候」と認めてあり、ここからも東郭が巖谷小波と親しかったことが窺える。

(15) 明治二十七年一月作「豆州漫筆」(『逍遙遺稿』正編)。

参考までに茲に『慈淚餘滴』の緒言を読み下しておく。

慈君常に世道の凌夷を嘆じ、重に命ずるに匡濟を以てす。重や頑魯、當たる所に非ざるなり。然りと雖も、百年講學し、此の身にして未だ死せざれば、則ち慈志の万に一つも酬ゆる所以の者、或は得ること有るに庶幾からんか。此の編は固より芸窓の小戯にして、遺愁の餘に成り、敢へて衆を大方に博せず。而して其の顔に慈淚餘滴と曰ふ者は、専ら重の筆に非ざるを示すなり。

慈君實に涙有り矣。

(17) 橋本夏男「中野君志想ノ一斑」(『逍遙遺稿』雜錄所収)に「君ハ理想派ヲ以テ最モシルレルヲ慕フ余ハシルレルノ崇拜者ナリトハ君自ラモ謂ヒシ所ナリ獨リ詩ニ於テ之ヲ慕フノミナラズ亦其氣質ヲモ愛セシニ似タリ」という。

(18) この他、明治二十五年十月の『城南評論』第八号には狂残子による「雨夜文談」が載せられている。(『狂』は狂骨子と称した中野逍遙、(『残』は残月子こと佐々木信綱である。

(19) 佐々木信綱は、逍遙の葬儀の際に、その誄辭の中で「君が最後に作りし鏡を埋むる賦琴を推く賦憂憤賦ハ百世に傳はりて有情なる人に永く君の心の秘密を語らむ」と述べている。(『俊聡院葬祭略記』所収)

落合東郭について調べる上で、落合秀氏から手紙による御教示を得た他、熊本県立図書館・熊本大学図書館・東大明治新聞雜誌文庫等にお世話になった。また店の奥に落合東郭の揮毫になる舒文堂の扁額が掲げられている河島書店の河島又生氏からは、落合東郭による屋号命名の由来について伺うことができた。ここに御礼申し上げる。なお、河島氏が還暦記念に刊行された『書肆三代』(昭和五十二年)にはその話を含め、他に○落合東郭先生の御逝去、という一節が立てられているなど、興味深い内容が多々ある。

【訂正】

前稿「『逍遙遺稿』札記——高橋白山・月山父子のこと他——」(『椋山女学園大学研究論集』第三十号人文科学篇、一九九九年三月)には、次のような誤記誤植の箇所があったので、訂正させていただきたい。いつもながら蕪雑なノートに眼を通し、ご批評下さった方々に感謝する。

(誤) (正)

八三頁上段一五行目 廬蔵用↓廬蔵用

八九頁上段一四行目 あった↓あつた
八九頁下段 五行目 念頭を↓念頭に
八九頁下段二三行目 これ物↓これ物

この他、七九頁上段二二行目 高橋月山に寄せた詩の第三十一句「詩抵楚經貫秦漢」について、九州大学の竹村則行氏から「詩は楚經の秦漢を貫くに抵る」と読むべきではないかとの御教示をいただいた。たしかにその方がよさそうだが、不明にして「楚經」という用例を知らないのので、とりあえずそのままにしておく。また八〇頁上段二〇行目「寸葵」の語釈で、「葵」を(ひまわり)としたが、原田憲雄氏の御教示によれば、本来(フユアオイ)で青木正兒『中華名物考』に見える由、このことも末筆ながら附け加えさせていただきたい。

(一九九九・九・一九稿)